

平成28年8月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 TEL0428-23-6859）

にじゅうさんや

人と月の関わる行事といえば、現在では「お月見」ですが、かつては「月待^{つきまち}」も行われていました。古来、月の満ち欠けは日時の推移を計る基準であり、暮らしの中で重要な役割を持っていました。月への信仰が自然に生じ、いつしか「月待」という信仰行事が行われるようになりました。特定の月齢の夜、人々が集まって念仏を唱えたり、飲食を共にしながら、月の出を待ち拝む信仰です。十三夜・十五夜・十七夜・十九夜・二十三夜などの特定の月齢の夜が多く、三日月の例もあるなど様々で、月齢を冠した名前の講が行われました。祀る月齢は一定でしたが、毎月祀るという所は少なく、正月・5月・9月の3回、正月・11月の2回などと多様でした。信仰者は組や小字を単位とする場合が多く、年齢や性別による例もありました。

青梅市内の月待行事は、板碑・石幢^{せきどう}・石像・灯籠など計12基の月待塔があることから、室町時代には行われており、江戸時代にも盛行したことが窺えます。さらに、明治6（1873）年に新暦（太陽暦）が採用されてからも、二十三夜の月を祀る“二十三夜講”が、最近まで行われていたことが、数例記録されています。

ここでは、二十三夜講が行われていたのではないかとと思われる新例に出合ったので、紹介します。

平成27（2015）年に、成木七丁目在住の昭和6（1931）年生れ・84歳の男性から伺った話です。「高水山常福院への参道途中に、“にじゅうさんや”という場所がある。土地の人達の間で、“にじゅうさんや”で仕事をしてこよう、“にじゅうさんやに集合”などと、山の場所の地名として使っている。この“にじゅうさんや”の場所は、現在は植林した樹木が育って見晴らしは良くないが、かつては東京（江戸）湾の帆掛け船が見えたというほど、眺望の良い所だったと聞いている。“にじゅうさんや”の意味は分からないまま使っている。」

この“にじゅうさんや”は、“月齢の二十三夜”で、かつては二十三夜の月の出を拝むため、人々が集まって飲食を共にしながら過ごしていた場所、二十三夜講の行われていた場所であろうと、推測されます。

市内では、他に次のような記録があります。

1. 柚木町二丁目の“二十三夜淵”・“月待結衆十三仏板碑”・“二十三夜さま”

柚木町2-440付近の多摩川に“二十三夜淵”と呼ばれる淵があり、近くには、“文明二年十月廿三日の月待供養一結衆敬白”と刻された“月待結衆十三仏板碑”があります。文明2年は西暦1470年、室町時代です。昭和55（1980）年発行の『青梅市の板碑』では、「最近まで、“二十三夜さま”というおヒマチをこの場所で行っていた。」とされています。

2. 二俣尾五丁目の“二十三夜講”

『青梅市の石仏』に掲載された昭和47（1972）年の調査では、次の2例が記録されています。

（1）明治26（1893）年生まれの女性の話

「平溝庭場では、二十三夜講が3月・9月の23日の年2回行われていました。15軒ある庭場では、男衆が1軒から1名出て、昼間は道普請をし、夜は午後7時から9時頃まで高源寺で、御飯・おみおつけ・おしんこなどで食事をしました。多少の御酒も出たようです。食事の用意は、家順に交替で当番になり、講でかかった費用は“かかり勘定（均等割り）”でした。講は戦争（アジア大平洋）で止めてしまいました。」

（2）明治32（1899）年生まれの男性の話

「大沢では、戦争（アジア大平洋）前までは年に3回か4回、23日に11軒が集まって二十三夜講をやった。各家から男衆が1人出て、精進堂でケンチン汁などを食べたもので、掛軸などもないし、お経や真言を唱えることなどもしなかった。」

3. 成木三丁目^{あまがさす}天ヶ指^{さんやこう}の“産夜講”

天ヶ指には“産夜さま”と呼ばれる勢至菩薩像があり、安産祈願が行われ、安産の御礼として布で作ったタスキが奉納されています。勢至菩薩像は、本来は“二十三夜待”の供養塔として造立されたのが、“三夜さま”と呼ばれるようになり、いつしか“産夜さま”に変わっていったと考えられています。それにつれて“二十三夜講”も“産夜講”に変化し、女性の講になっていったと推察されます。全国でも、安産祈願が行われるようになった二十三夜講は、少なからずあります。月の満ち欠けが生命力に深い関わりを持つと、信じられていたからであろうとされています。

『青梅市の石仏』には、昭和48（1973）年の調査での、明治31（1898）年生れの女性の話が掲載されています。

「現在26戸で産夜講をやっています。講に出るのは女衆で、1戸1名です。日取りは、年1回10月23日です。昔は家の順にヤドをやっていましたが、今は順番に2軒ずつ当番になり準備します。ヤドは天ヶ指の公会堂です。この日には（成木）熊野神社の御札を配ります。私がここに引越してきたのは昭和の初めで、すでに産夜講をやっていました。昔はヤドが各家から米5合を集めて、二本竹（成木三丁目）などで粉に挽いてもらい、小豆の餡入り団子をこさえました。5合で30個くらいはできたでしょう。小豆などの費用は、かかり勘定（割り勘）で払いました。今では団子などは作らず、仕出しをとっています。」

この産夜講は、平成18年で終息しています。

（文責 三好 ゆき江）